

気が付けば4月も下旬に入り冬鳥たちの姿もほとんど見られなくなりました。2013年冬（以下今冬）は、北日本ばかりでなく関東でも大雪が降り、鳥たちの生息にも何か影響があったのではないのでしょうか。一方で、今冬は冬鳥が少ないとの声も聞かれました。はたしてマヒワやアトリといった冬鳥ウォッチ対象種の鳥たちの生息はどのような状況だったのでしょか。以下に、2013年11月後半から2014年3月前半の記録をもとに報告いたします。

記録状況

今冬は、4月20日までに北海道から九州までの34名の方から合計79件、各種合計156件の記録が得られました（図1）。地域別では今冬も関東地方が39件と多く、全体の49%を占めていました（図2）。一方、昨年多かった四国・中国・九州地方は9件と再び減少してしまいました。しかし、今冬は、調査対象種6種すべてが記録できました。

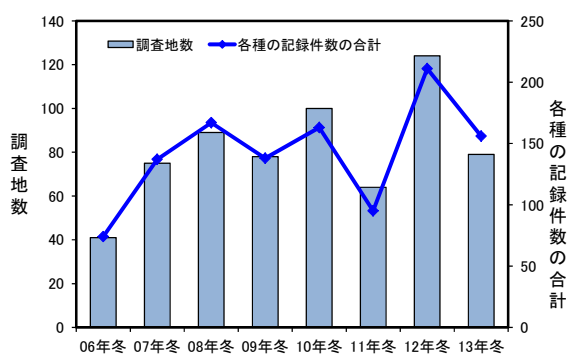


図1. 冬鳥ウォッチの記録状況の経年変化

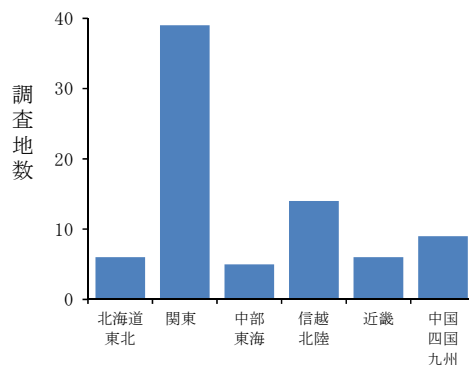


図2. 2013年冬の大まかな地域ごとの調査地の比較

各種の記録状況

図3は、2008年以降の調査対象種6種の記録件数の推移と各冬の群れランクの記録状況をまとめたものです。まず、昨年記録件数が49件と多かったマヒワは、今冬には22件と半数以下に減ってしまいました。最多個体数は北陸地方の300羽前後ですが、50羽以下の小さな群れが全体の63%を占めていました。一方、アトリは、記録件数が36件で2008年以降3番目に多く情報が届きました。個体数をみると最多個体数は愛媛県で約2000羽が記録されましたが、101羽以上の大きな群れはわずか5件で、全体の約64%は50羽以下の小さな群れでした。さらに、調査地を大きく4地域に分けて記録件数を比較すると、関東以北や近畿・中部・信越地域では昨年よりやや多い一方で、中国・四国・九州地方では昨年の16件と比べると著しく少ないことが分かりました（図4）。関東以北では記録件数こそ多いもののほとんどが50羽以下の小さな群れでした。昨年は、秋口からアトリの群れが多く

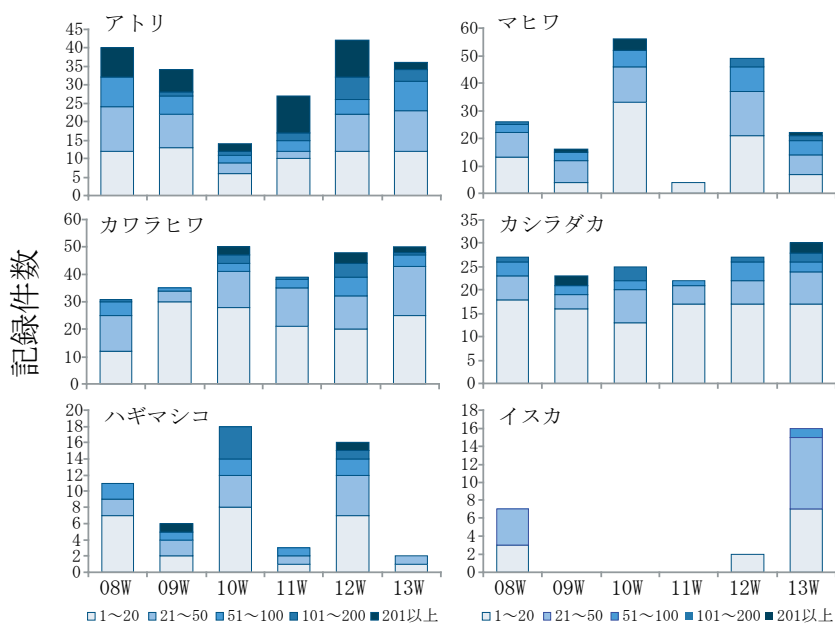


図 3. 2008 年以降の調査対象種 6 種の記録件数および群れの大きさの比較

記録され、10,000 羽もの大群が全国的に記録されました。これらのことから、今冬のマヒワとアトリの個体数は全国的にやや少ない目と考えられます。

一方、今冬の特筆すべき点は、イスカの記録状況です。イスカは例年情報件数が少なく、2008 年に 7 件が記録されたのち 09 年から 11 年までまったく記録されず、12 年に 2 件があっただけでした。ところが、今冬は 11 月ごろからイスカの情報が届くようになり、合計 16 件と過去最多件数を記録しました。ただ、記録された群れはそのほとんどが 50 羽以下で、50 羽以上は 1 件のみでした。しかし、イスカの記録は東北地方から関東、北陸・信越地方、近畿、四国と広い範囲にわたっていました。群れこそ小さかったものの、今冬はイスカの当たり年とも言えると思われます。

イスカと逆の状況だったのはハギマシコでした。ハギマシコは、昨年の記録件数が 16 件で 2010 年に次いで 2 番目の多さでした。ところが、今冬ではわずか 2 件と 6 種の中では最低となってしまいました。群れの大きさも 17 羽と 30 羽で小さなものでした。図 3 をみると、ハギマシコの記録件数はほぼ 1 年ご

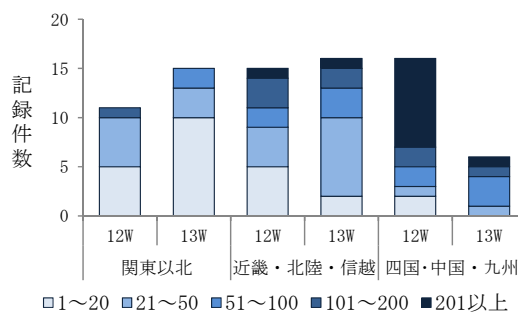


図 4. 2012 年と 2013 年のアトリの記録状況の地域ごとの比較



イスカ：撮影 大塚 啓子

とに増減を繰り返していることがわかります。本種の食物は、草本植物の種子で木の実のように豊凶の年変動が少ないと考えられています。とすると繁殖地での繁殖成績などが関係しているのでしょうか。さらに継続してデータを集めて行きたいと思います。

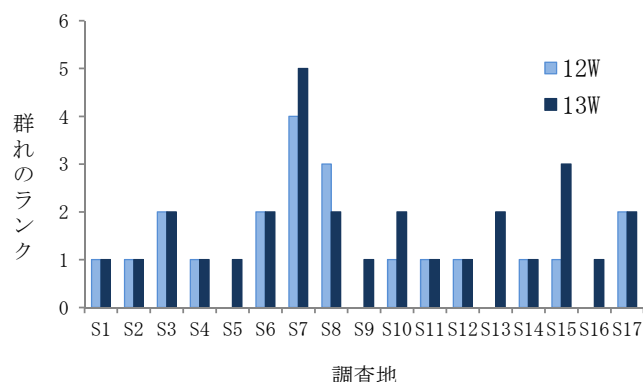


図 5. 2012 年と 2013 年の同一調査地におけるカシラダカの群れの大きさの比較

これらの冬鳥たちほど顕著ではなかったものの、昨年までと多少異なっていたのはカシラダカでした。今冬の記録件数は 30 件で、わ

ずかな違いですが 2008 年以降の最多件数を記録しました。また、群れの大きさでも 50 羽以下が約 80%と多いものの、100 羽以上や 200 羽以上の大きな群れも記録されました。そこで、群れの大きさを昨年と同じ調査地 17 か所で比較しました (図 5)。すると、昨年より群れランクが多かった調査地は 7 か所、昨年の方が多かった調査地が 1 か所、同じだったのが 9 か所で、今冬の群れランクの方が昨年より有意に多いことがわかりました (Wilcoxon の符号付順位検定 $P=0.039$)。ただ、同じ調査地のほとんどは関東地方のため、今回の結果が全国的な傾向なのかそれとも関東地方に限った傾向なのか、さらには単なる偶然の結果なのかはよくわかりませんでした。これらを明らかにする上でも、さらに多くの情報を得る必要があります。

カワラヒワは、カシラダカと同様にあまり記録件数の変動が少ない種です。本種は市街地の公園などにも生息する身近な鳥のため、例年情報件数が最も多い種です。今冬は 50 件と 2010 年とともに最多件数を記録しました。しかし、その 86%は群れの大きさが 50 羽以下の小さな群れで、昨冬に比べて大きな群れの記録が少ない傾向にありました。本種の大きな群れは、四国や九州などで記録される傾向にあります。昨年は、四国で 2000 羽以上や 400 羽以上の大きな群れが記録されましたが、今冬も熊本県では 750 羽もの群れが報告されました。今冬は、四国地方や九州地方の情報が少なかったため大きな群れの情報が少なかったのかもしれませんが。なお、関東の一部の地域では、今冬のカワラヒワは森林内のシデ類などの木の実に群れていたとの報告もありました。

まとめ

以上のように今冬は冬鳥ウォッチ対象種の 6 種すべてが記録されました。アトリやイスカは記録件数が多かったものの全体的に個体数は少ない傾向でした。2013 年の秋は、山地に木の実が多くなっていました。そのため、アトリやマヒワが山から下りてこなかったのかもしれませんが。標高の高い山地に多く設置されている、環境省のモニタリングサイト 1000

のコアサイトの調査では、今冬、過去5年のなかで最も多くのアトリ科の鳥が記録されています。

さて、冬鳥ウォッチも今冬で8年目となり、いくつかわかってきたことや気になることがでてきました。まず、ご提供いただく記録件数は、2008年や2012年のようにアトリやマヒワが多い年に情報も多くなり、2011年のように少ない冬には情報件数も少ない傾向がありました。おそらく、アトリやマヒワなど普段あまり身近にいない鳥が平野部で多い年には、鳥たちの生息状況に顕著な違いがあることがわかり観察者の方が冬鳥ウォッチに記録を提供しやすいものと思われます。

もうひとつ気になっていることは、カシラダカやカワラヒワの日本における越冬分布や生息状況の地域的な違いです。まだ、情報件数が少なく解析できるほどではないのですが、カワラヒワの1000羽前後の大きな群れの情報は、関東などでは報告されておらず四国や九州といった西日本で記録されています。これはカワラヒワの越冬状況の日本における地域的な違いがあることを示唆しているように思われます。そして、この違いは彼らの採食環境である農耕地の作物や農作業の地域的な違いと関係している可能性があります。また、カシラダカの情報は、関東地方などでは多いものの中部以西ではあまり多くありません。これが単に全体の情報件数が関東で多くそれ以外の地域で少ないためと考えることもできます。しかし、カワラヒワやアトリの記録があってもカシラダカの欄は空欄のことが多いことから、生息数自体が少ない可能性があります。冬鳥ウォッチはアトリやマヒワなどのダイナミックな年変動ばかりでなく、身近なカシラダカやカワラヒワの生息状況の地域的な違いを考える上でも重要な調査と言えそうです。これらの疑問を明らかにする上でも、さらに多くの地域から多くの情報が必要です。今後とも継続してご協力いただきましたなら嬉しい限りです。今冬に記録件数が多かったイスカは2014年冬には再び減ってしまうのでしょうか。今冬少なかったハギマシコやマヒワは再び増加するのでしょうか。さらにカワラヒワの大きな群れはどこで記録されるのでしょうか。今から楽しみです。

以下に、情報をご提供いただきました皆様のご芳名を記してお礼に替えさせていただきます。有難うございました。

荒木廣治、石川喜春、石塚文信、井上賢三郎、今森達也、植田睦之、上田平安、内田博、大塚啓子、金子はる子、木村雅世、木村有紀、小林俊子、小松周一、齋藤映樹、鹿間信弘、白石ひとみ、鈴木啓史、高橋邦年、田中正晴、谷口正一、谷本洋子、栃谷満夫、富川徹、長嶋宏之、西教生、野中純、濱伸二郎、平野敏明、藤波不二雄、三上かつら、宮田聡、村田安正、湯浅芳彦の各氏（五十音順）

とりまとめ 平野敏明